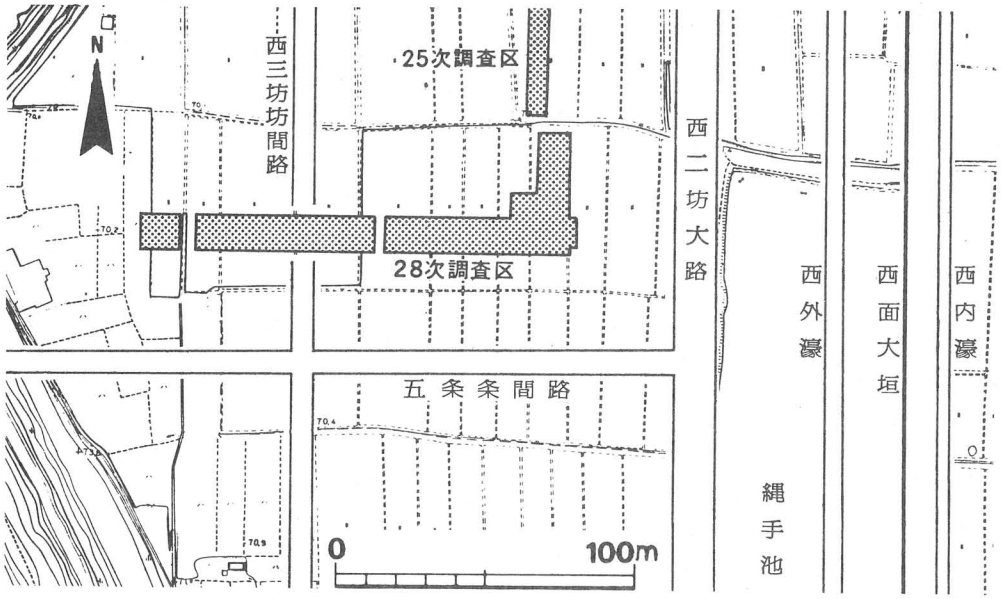
藤原京右京五条三坊の調査（第28次）

（昭和54年11月～昭和55年3月）

この調査は，藤原京内を通る国道165号線橿原バイパスの建設工事に先立って実施したものである。国道165号線バイパス関係の調査としては2年目にあたり，先に第25次調査を実施している（概報10）。 今回は第25次調査地の南方にL字状の調査区を設定して調査を行った。調査地は藤原京右京五条三坊北東坪と北西坪の想定地にあたり，西三坊坊間路の存在が予想された。従って調査の目的は，西三坊坊間路および坪内の遺構を明らかにすることにあった。

調査地の層序は，上から耕土，床土，暗灰褐色粘質土，灰褐色粘質土，暗褐色土，暗褐色砂質土の順になり，暗褐色砂質土は弥生式土器の包含層である。地表下約1.3mの暗褐色土層上面で藤原宮期の遺構を検出したが，暗褐色土は調査区東端から約40mの所でなくなり，それ以西は下層にあたる暗褐色砂質土上面で遺構を検出した。

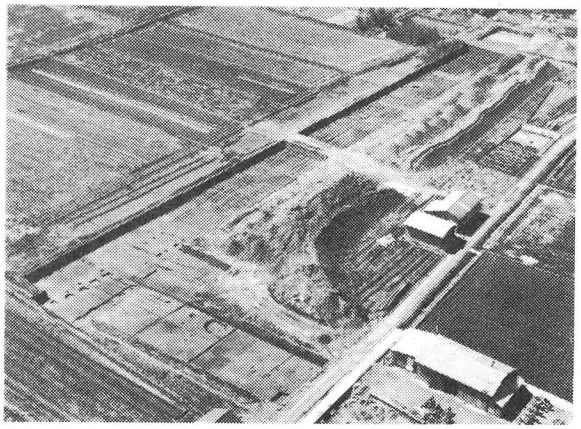
検出した遺構の時期は，藤原宮期，奈良時代，弥生時代，中世以降，その他



調査地位置図（1：2500）

に区分されるので，ここではその区分に従って説明する。

藤原宮期の遺構　西三坊坊間路SF 2740のほかに掘立柱建物SB 2750，掘立柱塀SA 2746，井戸SE 2743・2747，土壙SK 2751・2752がある。井戸SE2747以外の遺構はいずれも右京五条三坊北東坪で検出した。



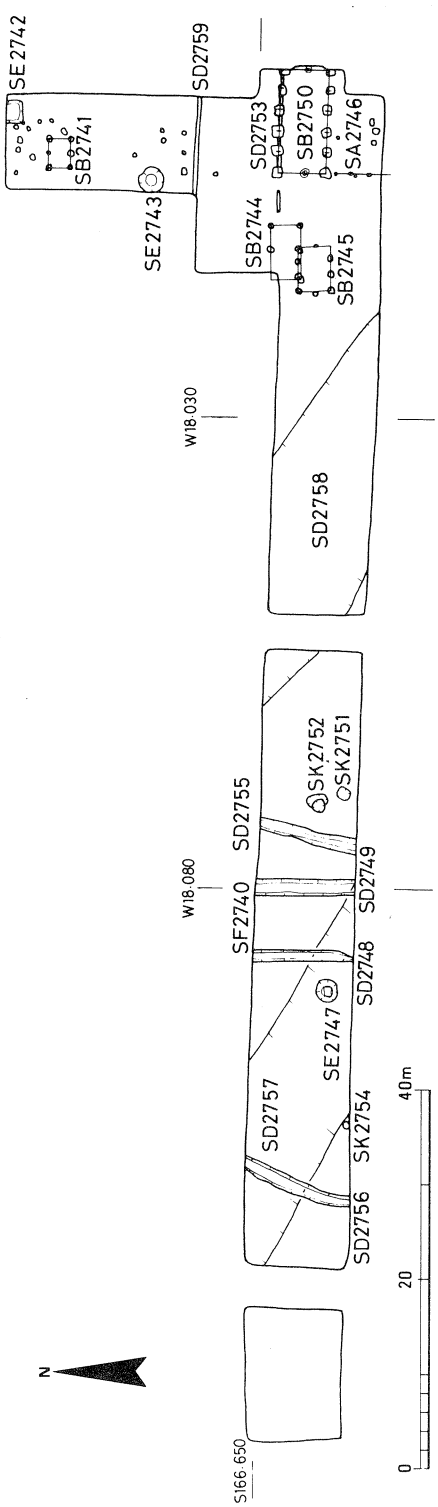
調査地全景（北東から）

西三坊坊間路SF 2740は，調査区のほぼ中央にある。南北溝SD 2749・2748はその側溝である。SF 2740は側溝心々距離で7.3m，路面幅が5.7mとなる。西側溝SD 2748は幅約1.5m，深さ0.15～0.35m，東側溝SD 2749は幅約1.7m，深さ0.2～0.6mの素掘りの溝である。両溝からは藤原宮期の土器が出土した。なお，坊間路と坊内を画する塀などの遺構はみられなかった。

SB 2750は調査区南東隅にある。桁行5間，梁行2間の東西棟建物である。一部の柱は抜取られている。柱間寸法は梁行が2.1m等間，桁行が2.25m等間に復原できる。側柱列の柱掘形は一辺0.8～1.2mの方形をなし，深さは0.6mである。東と西の妻柱の柱掘形の底には根固め石として1～3の石が置かれている。この建物の方位は方眼北に対して，わずかに西に偏している。なお，南東隅の柱抜取り穴からは土師器の甕が完形で出土した。SB 2750の西妻柱列に柱筋をそろえて，南北塀SA 2746がある。2間分を検出したが，さらに南へ延びる可能性も残る。おそらく，SB 2750の目隠し塀であろう。

東西溝SD 2753はSB 2750の北側柱の掘形と重複する東西溝である。幅0.4m，深さ0.3mの規模をした素掘りの溝で，SB 2750よりも古い。溝内からは藤原宮期の土器が出土している。この溝の北方約8mにも同規模の東西溝SD 2759がある。これらの溝の性格は不明である。

井戸SE 2743は，SB 2750の北方13mにある。掘形は井戸枠抜き取り時に壊され，規模は明らかでない。抜取り跡の平面形は円形を呈し，径3.0m，深さ



第28次調査遺構配置図（1：800）

は1.95mある。埋土からは7世紀前半から藤原宮期に至る土器が出土した。

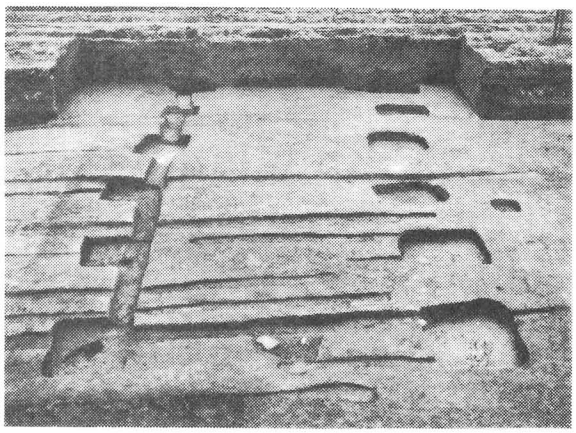
井戸SE2747は西三坊坊間路の西側溝の西4mにある。直径1.8m，深さ1.6mの規模をした掘形の中に内法方0.6mの横板組み井戸枠が残る。井戸枠は縦35cm，横75cm，厚さ約2cmの板を三段に積み重ねたもので，四隅には支柱が立てられている。井戸底には楕円形曲物の側板を据え，その周囲には小礫を敷きつめている。

土壙SK2751・2752は西三坊坊間路東側溝の東約10mにある。平面形はいずれも不整円形をなし，SK2751は径1.7m，深さ0.3m，SK2752は径2.0m，深さ0.2mの規模である。埋土には小礫や焼土が含まれ，藤原宮期の土器が出土した。

奈良時代の遺構　調査区北端で検出した井戸SE2742がある。井戸枠は抜き取られ，掘形の形状も不明である。抜取り跡の平面形は方形で，東西2.4m，南北2.0m以上の規模となり，深さは1.7mである。埋土からは奈良時代中頃の土師器皿，甕，横瓶のほか土牛，木製品が出土した。

弥生時代の遺構　土壙SK2754，斜行溝SD2755・2756，河川状遺構SD2757・2758がある。土壙SK2754は調査区西方の南端にあり，平面形は不整円形をなし，径1.1mある。SD 2755・2756は南西から北

東方向に流れる斜行溝で，ＳＤ2755は幅約1.6ｍ，深さ約0.6ｍ，SD2756は幅約2.0ｍ，深さ約0.5ｍある。河川状遺構ＳＤ2757・2758は南東から北西方向に流れるもので，幅は各々12ｍと17ｍである。これらの遺構からは，いずれも畿内第Ｖ様式の弥生式土器が出土している。



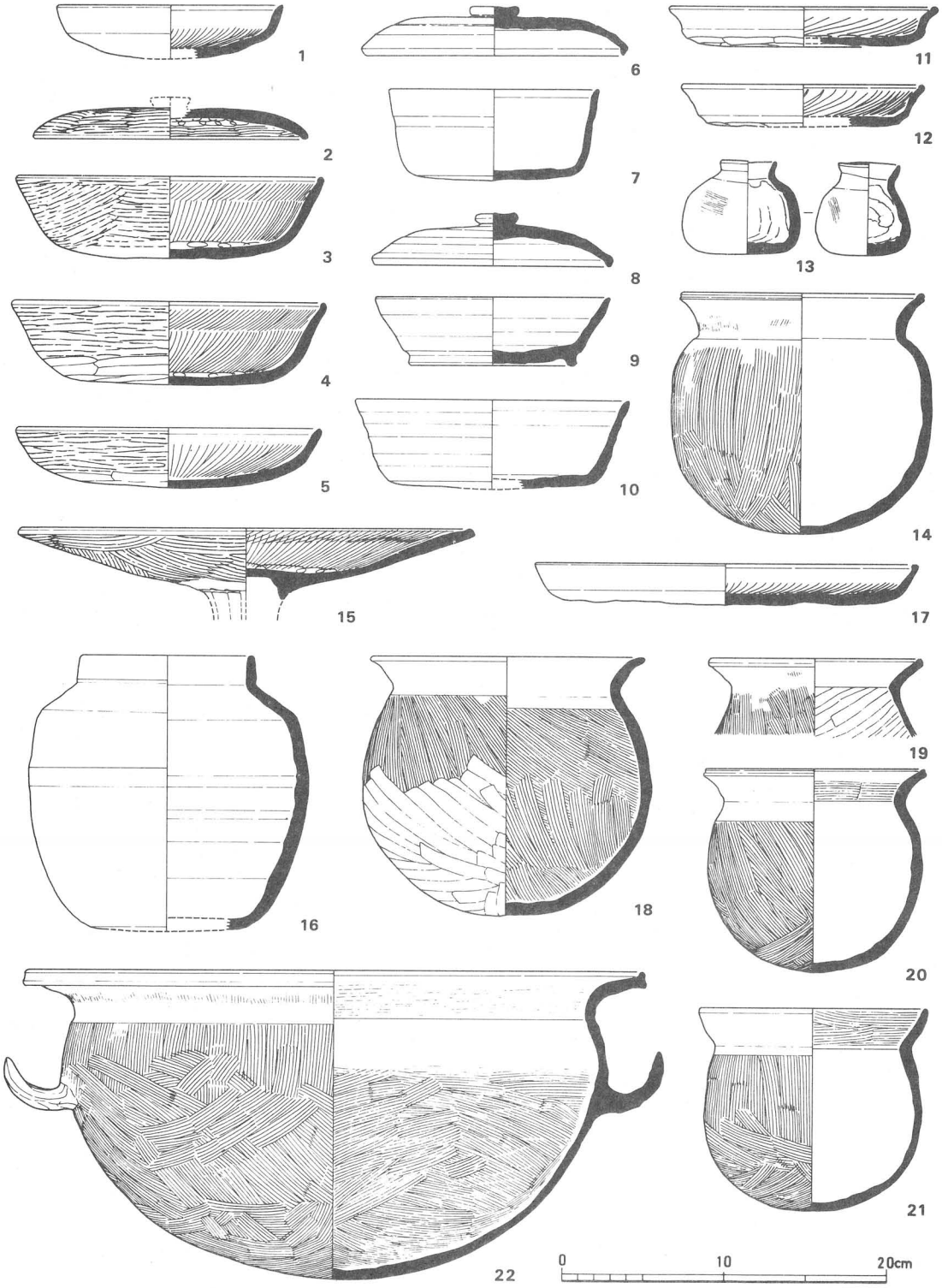
ＳＢ2750（西から）

その他の遺構　掘立柱建物SB 2741・2744・2745がある。SB2741は調査区の北端にある桁行２間（総長３ｍ），梁行１間（2.4ｍ）の東西棟建物である。SB2744・2745はSB2750の西にある東西棟建物で，柱掘形の重複関係からみて，SB2744が新しい。SB2744は桁行２間（総長5.7ｍ），梁行１間（3.0ｍ）である。SB2745は桁行３間，梁行２間の建物で，柱間寸法はともに1.8ｍ等間である。このほかに，南北，東西方向に掘られた小溝を多数検出したが，いずれも中世以降のものである。

ここに述べた３棟の建物は，柱掘形から遺物が出土していないことや建物の方位が藤原宮期の建物SB2750の方位とも一致しないことから，その時期については不明である。ただ，今回の調査地の東方にあたる藤原宮西方官衙地域では掘立柱建物からなる７世紀後半の集落が明らかになっており，今回検出した建物はその集落の一部を構成する可能性もある。

出土遺物　瓦塼類，土器，土製品，木製品がある。瓦の出土量は少なく，いずれも小片である。軒平瓦には三重弧文のほか6646Ｅ・6641Ｈ型式，軒丸瓦には6276A・6275E・6271A型式がある。このほかに熨斗瓦，塼が出土した。

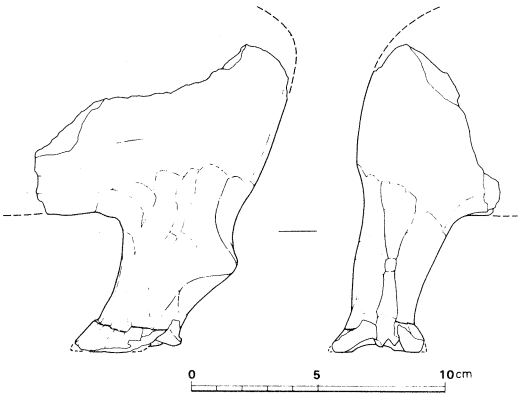
土器では弥生時代（畿内第Ｖ様式）から中世（瓦器・土師器）に至るものが出土している。ここでは藤原宮期と奈良時代の土器を図示した。１～７・15はSK2751，８・９・16はSE2747，10・17～22はSE2743，11～14はSE2742から出土したものである。このなかでもSE2742出土土器は平城宮Ⅲ段階に属



出土土器実測図

するものと思われる。

木製品では曲物，付札状木製品，土製品には土牛がある。土牛は，奈良時代の井戸SE2742から出土した。土牛は左後肢部分の破片であるが，牛の顕著な特徴である蹄および突起する足根部を入念に作り出して表現している。奈良時代の土牛の出土例としては，大阪府羽曳野市茶山遺跡（『羽曳野市文化財調査報告書』4　昭和54年）に次いで2例目であり，注目される。



井戸ＳＥ2742出土土牛実測図

まとめ　今回の調査ではバイパス建設工事に伴う路面敷の調査であったため，坪内の利用状況を明らかにするまでには至っていないが，藤原京右京五条三坊にある西三坊坊間路と北東坪に配置された建物・井戸を明らかにすることができた。北東坪では坊間路寄りに建物はなく，坊間路心の東方80ｍの地点，すなわち西二坊大路寄りに東西棟建物と井戸が配置されている。

また，この地域では奈良時代の遺構（SE2742）が明らかになった。藤原宮の西方では，宮西面外濠が11世紀後半まで水路として機能し，近くに藤原宮期以後の集落の存在が推定されていたが（第23―5次調査，概報10），今回井戸を検出したことによって，この地域における藤原京以降の土地利用のあり方を探る手懸りが得られた。

なお，今回明らかになった西三坊坊間路の路心を国土方眼座標で示すと，

X＝－166,655.000ｍ

Y＝－018,083.650ｍ　となる。